

## 世界史

I 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

前1世紀ころに、北方ツングース系である<sup>はく</sup>貊族の一派が、鴨緑江の支流域に高句麗を建てた。高句麗は、漢の直轄領であった楽浪郡を313年に滅ぼして朝鮮半島北部を支配下に置き、4～6世紀初めに最盛期を迎えた。特に第19代王の時代には、<sup>[1]</sup>周辺諸国を次々と侵攻して領土を飛躍的に拡大し、現在の中国遼寧省・吉林省と朝鮮半島北部を含む広大な地域を領有するまでに至った。その後も高句麗は南進政策を続け、427年には朝鮮半島北部大同江流域の  に遷都した。

一方、朝鮮半島の南部では、 族と呼ばれる部族が多数の小国を形成していたが、やがて統一が進み、東側に新羅、西側に百済が成立して、南側の地は加羅(加耶)諸国となった。その後、加羅(加耶)諸国は新羅に滅ぼされ、朝鮮半島ではしばらくの間、高句麗・百済・新羅が鼎立する時代が続いた。<sup>[2]</sup>

中国大陸で隋・唐という統一王朝が相次いで成立すると、朝鮮半島を含む東北アジアの情勢は大きな変化を遂げた。589年に陳を滅ぼして南北朝を統一した隋王朝は、東北アジアの強大国として君臨していた高句麗の討征を試みた。第2代皇帝の煬帝は、100万を超える軍勢のもとに三次に及ぶ大規模な遠征を行ったが、高句麗は果敢に対抗しこれを退けた。隋が滅び618年に唐が成立すると、第2代皇帝の  は、北方の東突厥を服属させた後、隋時代からの宿願であった高句麗討伐に着手した。

唐の攻撃を警戒した高句麗では、<sup>せんがいそぶん</sup>泉蓋蘇文がクーデタを起こして実権を掌握し、百済と同盟する政策をとった。孤立して窮地に陥った新羅は、唐に使者を派遣して援軍出兵を要請した。こうして、7世紀半ば頃の東アジアでは、唐-新羅と高句麗-百済という二つの陣営が対立することとなった。結局、唐と連合した新羅が、660<sup>[3]</sup>年に百済を破り、続いて668年に高句麗を滅ぼした。その後、新羅は唐の勢力を排除して、最終的に朝鮮半島の統一を果した。

しかし、新羅の支配した地域は、朝鮮半島の中部以南に限られ、かつて高句麗が領有した北部地域の大半は領土に含まれなかった。一方、鴨緑江以北の旧高句麗領では、高句麗の遺民や<sup>まつかつ</sup>靺鞨族を糾合した  によって渤海国が建てられた。こうして8世紀以降の東北アジアでは、高句麗・百濟・新羅が鼎立する時代に代わって、新羅と渤海が併存する時代が訪れた。

新羅と渤海は、いずれも唐の律令体制・都城制・仏教文化などを導入しながら、国家整備を行っていった。新羅の場合、 制と呼ばれる民族的な身分制度の上に、唐の官僚制度を導入し、首都の を中心に華麗な仏教文化を築き上げた。また、渤海も、唐の文物や先進制度を積極的に導入しながら国作りを行っていった。首都である上京 府も唐の長安を模して造られたものとされる。こうして渤海は、8～9世紀にかけて「海東の盛国」と呼ばれるほど大きく栄えていった。

- [1] 現在中国の吉林省集安市に、この王の領土拡張事績を称えた巨大な石碑が残されている。この王の名前を記せ。
- [2] この時代を何時代というか。
- [3] この時、百濟救援の軍を送り、白村江で唐・新羅連合軍に大敗した国はどこか。

Ⅱ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

宋代以降の軍事制度の展開にはいくつかの特徴がある。その一つは、軍隊の統帥権を中央政府に集中させることで、時の王朝を何度も倒してきた地方軍閥の台頭<sup>[1]</sup>を避けることに成功したことである。また、明清時代には兵役の世襲制が常態となったこともその特徴の一つである。

明代に採用された兵役制度は衛所制といわれる。衛所制は、租税負担を免除される代わりに代々世襲で軍役を負担する軍戸が交代で兵士を供出し、その兵士は県などに置かれた駐屯地に配属されて、そこで屯田を耕して自給自足しながら兵役を務めるという兵農一致の制度<sup>[2]</sup>であった。しかしながら、自給自足によって軍費をまかなうという当初の目論見は、計画通りにはいかなかった。特に、辺境地域では農業生産力が低く、自給自足は困難であった。その結果、15世紀中頃から、明朝政府は彼らに補助金を支給しなくてはならなくなり、北辺の軍事的緊張の高まり<sup>[3]</sup>によってその額は着実に増加していった。このような明朝による現金支援にもかかわらず、衛所制による常備軍は兵数の面でも戦闘力の面でも衰退していった。明中期以降、軍戸の逃亡や軍籍の遺漏、官僚・豪族による軍屯地の不法占有などにより自給自足体制が崩れた結果、衛所制を維持することは困難となり、明末には全く無力化してしまった。

次の清代の軍事組織は八旗と呼ばれる。「旗」は満州語で軍団の単位を意味する「グサ」の漢訳で、全軍団を八つに分けたので「八グサ」、即ち、八旗と呼ばれた。八旗の基本単位は成年男子300人で構成される「ニル」と呼ばれる集団で、ニル毎に兵士を供出した。5ニルを1ジャランとし、1グサは5ジャランで構成されていた。初め八旗は満州人を中心として編成されたが<sup>[4]</sup>、モンゴル人や漢人の帰順するものが増えてくるのに伴い、モンゴル人で編成された蒙古八旗と漢人で編成された

八旗も創設された。八旗に所属する武人階級を  というが、彼らはその経済的基盤として清朝政府から土地を支給され、その土地を経営することで軍馬や武器などの費用をまかなっていた。しかし、中国本土平定後、平和が続く生活が奢侈化していくにつれて、支給された土地の経営だけでは  の生活は成

り立たなくなり、次第に、清朝政府からの俸給に依存していくようになった。この  
 [5]  
 ような経済的困窮化に伴って、八旗の軍事力も弱体化していった。

かくて、19世紀が始まる頃までには、清朝の軍事力は、八旗ではなく、漢人からなる兵で編成された [C] に事実上依存するようになっていた。ところが、この [C] は平時には地方の治安維持など民間と接触する職務を持っていたために、これもまたその軍隊としての能力は徐々に低下していった。19世紀中頃、中国近代史上最大の農民反乱といわれる太平天国の乱が起こったが、清朝がこの乱を乗り切ることができたのは、[C] よりも、むしろ、漢人官僚が集めた淮軍や湘軍などの [D] と呼ばれる民兵の働きによるものであった。

こうした変化の中、各地方の軍閥が再び登場する基盤が作られていき、1912年に清朝が滅ぶと、またもや各地に軍閥が台頭することとなるのであった。  
 [6]

- [1] 10世紀初頭、唐の節度使でありながら唐を滅ぼし後梁を建国した人物は誰か。
- [2] 兵農一致の制度は、唐や北宋でも行われている。北宋の場合は、新法の一つとして、それ以前の傭兵制に代わるものとして実施された。これを何法というか。
- [3] 当時、北辺にはオイラトやタタールがあつて明朝を脅かしていたが、オイラトは、1449年に明軍を破って英宗皇帝を捕えた。この時のオイラトの指導者は誰か。
- [4] 八旗は当初は四旗だけで、八旗が揃ったのは1614年とされる。その2年後、ヌルハチは女真族の統一国家を建てたが、その国名を何というか。
- [5] 18世紀前半には、八旗制度の経済的基盤を安定させるための改革が時の皇帝によって断行され、その結果、従来、宗室諸王の下に統率されていた八旗は皇帝権のもとに統括されるようになった。この改革を断行した皇帝は誰か。
- [6] 東三省を拠点とした軍閥で、1928年に日本軍に爆殺された張作霖がその首領であったのは何軍閥か。

Ⅲ 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句や数字を記入し、下線部についてあとの問いに答えよ。

古くから人間は、自らの住む世界の果てには異形の怪物たちが住むと考えてきた。黒海沿岸やアフリカを旅し、実地見聞に基づいてペルシア戦争の「歴史」を語った **A** の場合ですら、その叙述が実際に訪れた土地を遠く離れるにつれて、そこに住む民族はどこか空想の影を帯びることになる。やがて、アレクサンドロス大王の遠征に同行した者たちがインドでの見聞を伝えたことで東方への冒険に乗り出す者が現れるようになる<sup>〔1〕</sup>と、ヘレニズム世界の住民にとって、怪物の住む土地はインドに固定されるようになった。例えば、ローマ帝国時代の **B** は『博物誌』においてインドの驚異や怪物たちを詳述し、後代の作家たちに大きな影響を与えている。

ところで、そうしたインドの怪物の中で、近世にいたるまでヨーロッパ人の想像力をかき立てたものに犬の頭をもつ人間たちがある。犬頭人はすでに前4世紀の段階でインドの山中に住む部族として描かれているが、彼らにある種の実在性を与え、その命を長らえさせたのは、なんといってもマルコ=ポーロの『世界の記述』<sup>〔2〕</sup>であろう。彼は自分が実際に訪ねたアジアの諸地域の記述に「アンガマン島」をめぐる一節を加え、香料を多量に産出するその島の住民が犬頭の食人種であると特筆したからである。

彼が「アンガマン」と呼んだ島は、ベンガル湾の東端に位置するアンダマン諸島のことである。この島をめぐる最古の記録は、天動説を提唱した2世紀のギリシアの天文学者 **C** によるものだが、そこではバザカタという島にアギンナタイと呼ばれる裸の部族が住むと述べられているにすぎず、犬頭人の記述は全くない。しかし、同じ海域の島々には食人種が住むとされており、このことが後の否定的イメージを引き寄せの一因となったのだろう。事実、9世紀のアラビア語資料には「色が黒く、毛髪はちぢれた」裸の食人種が住むという具体的な記述が見られ、すでにこの時点で、島民が実際には行わない食人習慣がアンダマン諸島と結びつけられていたことがわかる。

このような食人種伝承にマルコ=ポーロが犬頭人伝承を結びつけて以来、アンダ

マン島民はヨーロッパのみならずイスラーム世界でも、「犬頭の食人種」として登場することになる。14世紀のムスリム商人による国際的交易網を通じて世界を旅したイブン=バトゥータですら、食人習慣への言及はないものの、アンダマン諸島もしくは近隣のニコバル諸島の男たちについて、犬の口を持つと述べている。これに対して中国側の資料は、顕著な対照を示している。例えば、7世紀末に **D** が記した『大唐西域求法高僧伝』では、「裸人国」として両諸島のいずれかの風俗が述べられているが、毒矢を用いること以外に彼らの野蛮さを強調する言葉は見られない。また、鄭和による第四次 **E** 諸国遠征に同行した馬歡の記録でも、アンダマン島が言及されているが、やはり住民の裸形ぶりが述べられているにすぎない。

他方、犬頭食人種としてのアンダマン島民は17世紀になってもなおイスラーム世界では流布していたようだ。タイの **F** 王朝からの親書に応じるため、サファヴィー朝のシャー=スライマーンは1685年にナライ王への使節団を送り出したが、その見聞記にもやはりマルコ=ポーロが描いたのとそっくりのアンダマンの野蛮な犬頭人が登場するのである。しかし、彼らをめぐる説話にはイギリス人や **G** 人の姿も見え、アンダマン海近辺が近代的な世界システムへと徐々に組み込まれつつあったことをうかがわせる。とりわけ、**G** 人はアンダマン島に鉄を金に変える水があるという噂を信じて、その領有を狙ったと述べられており、そこには当時の政治状況が反映されているのかもしれない。ナライ王は、すでに東南アジア一帯に進出していた **G** の勢力拡大を恐れ、インド南部の **H** に拠点をおくフランスに接近して、その力を牽制しようとしていたからである。

アンダマン島が犬頭人や食人種といった神話のバールを完全に脱ぎ去ったのは、ようやく19世紀中葉になってからにすぎない。**I** 年に始まったインド大反乱では刑務所が真っ先に襲われたことから、イギリスは逮捕した重罪人の対応に苦慮していた。そこでイギリスは海外に流刑植民地を新たに築くことにし、その際に白羽の矢が立ったのがアンダマン諸島だったのである。その後、流刑植民地には独立運動に参加した政治犯がインドから多数収監されることになった。このためアンダマン島民をめぐる知識が徐々に蓄積され、犬頭人の神話も完全に廃れることになるが、その一方で、入植者によって持ち込まれた伝染病が、皮肉にも当の島民自身

を絶滅の危機に立たせることになる。

1942年の日本軍による占領とともに、インド国民軍を率いる J は、インド人にとってイギリスの圧政のシンボルとなったアンダマン監獄を訪れ、アンダマン・ニコバル両諸島がイギリス支配からはじめて解放された土地であると、宣言した。しかしこれと同じ頃、日本軍はスパイ容疑でアンダマンのインド独立連盟幹部を逮捕し、住民たちを処刑しており、この「解放」がうわべのものでしかなかったのは明白である。

1947年のインド独立にともない、両諸島はインドの連邦直轄領に組み込まれることになった。しかし、アンダマンを取り巻く政治状況は安定することなく、1948年<sup>[4]</sup>のビルマ連邦共和国の独立とその後の混乱や、1971年の第三次インド=パキスタン戦争による K 独立などによる近隣地域からの難民受け入れが、今日にいたるまで続いている。このように、もはや現代のアンダマン諸島には「犬頭人」は存在しないものの、今なおそこには国民国家の枠組みに収まらない様々な「他者」が吹き寄せられているのである。

- [1] 前300年頃にギリシア人のメガステネースを使節としてインドのマウリヤ朝に派遣したシリアの王朝を答えよ。
- [2] ヴェネツィア人のマルコ=ポーロはこの著作を監獄で口述した。彼を捕らえたのは、東方交易で栄えたヴェネツィアのライバル港市であった。このライバル港市とはどこか。
- [3] アイユーブ朝やマムルーク朝の庇護を受け、カイロやアレクサンドリアを拠点に、香辛料などの交易で活躍したムスリム商人たちを総称して何と呼ぶか。
- [4] ビルマの独立運動を指導したものの、独立達成の前年に保守派によって殺害された政治家は誰か。

## IV 次の文章を読んで空欄に最も適切な語句を記入せよ。

18世紀に北アメリカではイギリスの諸アメリカ植民地が独立して国家を形成し、その後1世紀弱でほぼ現在のアメリカ合衆国の領土を獲得した。ただし、それにはさまざまな対外的および国内的な条件が必要だった。

北アメリカには複雑な同盟・敵対関係が存在した。ヨーロッパで1756年から **A** とオーストリアが各国を巻き込んで戦った七年戦争は、北アメリカではフランスとイギリスの植民地戦争としても展開し、ここでのイギリスの勝利が七年戦争の帰趨に大きな影響を与えた。その結果、世界的な植民地の再配分をめぐって1763年に締結された **B** により、北方の **C** , および **D** 以東のルイジアナがフランスからイギリスに割譲された。これは、イギリスの北アメリカ植民地にとって、北方および西方の有力敵対勢力が消滅したことを意味する。もう一つの敵対勢力は、列強とさまざまな同盟関係を結んで自分たちの生存をはかった **E** であった。フランスの脅威がなくなった今、西方の土地の確保と農民の安全のため、 **E** は排除しなければならない存在となったのである。

しかし、膨大な戦費の処理を優先させたい本国政府は、植民地における新たな武力紛争を望まなかった。そのため、早くも1763年には国王宣言線を定め、アパラチア山脈以西への移住を禁じたが、植民地人はこれを無視したといわれる。さらに、1764年の **F** , 1765年の印紙法、1767年のタウンゼンド諸法などの増税策が植民地人の反発を呼んだ。印紙法に反抗したスローガン「 **G** 」は、近代における参政権をめぐる主要な論理として知られているが、土地は欲しいが税金は払いたくないという植民地のエゴイズムの表現でもあった。このように、植民地は本国による戦後処理策をめぐって反抗姿勢を先鋭化させていく。最終的には長期の独立戦争となり、1783年にイギリスはアメリカ合衆国の独立を承認した。この際、独立を求めた13植民地の領土に加え、1763年にイギリスに割譲された東部ルイジアナも新国家の領土となった。

実は、1763年の合意では、西部ルイジアナは **H** に譲渡されていた。1800年にその部分を密かに取り戻したフランスは、イギリスとの戦費捻出のため、1803年にはアメリカ合衆国にここを売却する。このため合衆国の領土は倍増し、大陸国

家としての基礎ができた。広大な土地を買収するというジェファソン大統領のこの決断に対しては、政治的に対立する  派から憲法違反との厳しい批判が寄せられた。しかし、イギリス型の工業振興・海外貿易を理想とする政敵との抗争に打ち勝って当選したジェファソンは農業による立国を目指していたため、彼にとって西部の広大な土地は魅力的だったのである。

その後のアメリカ合衆国の歩みを見ると、ジェファソンが夢見たように、確かに白人農民による西部開拓が歴史を変えてきたと言える。メキシコ北部に移住したアメリカ人が1836年に独立を宣言した  共和国をめぐる問題はその一例である。この共和国は、合衆国への編入を求めたが、メキシコとの対立激化を望まない政府は放置する。1844年にタイラー大統領は併合の条約を締結し、批准を否決した上院を乗り越えて翌年議会の承認を取り付け、 が州として編入された。その結果起こった  ではアメリカが圧勝し、太平洋に面する  を含む広大な土地を獲得した。同時期、イギリスとの外交交渉により  の国境を確定して編入している。奇しくも同時期に起こった  によって、新たに獲得した土地に大勢の人間が渡来することになり、西部開拓が急速に進んだ。そして、1867年の  購入が、アメリカ合衆国にとってアメリカ大陸における最後の大きな土地の獲得となった。